

〔批評と紹介〕

イギリス女性学の諸相（その2）

——1990年代の新展開——

有賀美和子

はじめに

前稿で述べたように、1990年代のイギリス女性学は、単に性やジェンダーのみならず、人種や階級等の多様な要素もその視座に含めようとする新たな段階に達している。それは、従来の主流フェミニズムに潜む白人中産階級主義的な前提に対する、黒人フェミニストらによる諸批判に呼応するものであった¹⁾。

イギリスの黒人フェミニスト、ジェマ・タング・ナインは、1991年の時点でなお自国（および合衆国）における「白人」フェミニズムと「黒人」フェミニズムとの二極化を明確に指摘しているが²⁾、同国の主流フェミニズムに対する挑戦は、ヘーゼル・カービーによるもの（Carby, 1982）を皮切りとして、1980年代半ば頃から盛んとなった（例えば、Anthias and Yuval-Davis, 1983; Amos and Parmar, 1984; Bryan *et al.*, 1985; Ngcobo, 1988; Parmar, 1989; Ramazanoglu, 1989）。彼女らは、暗黙に白人中産階級女性の経験を規範とした従来のフェミニズムに備わる人種差別主義^{レイシズム}を指摘するとともに、女性間の差異（difference）への注目を喚起してきた。こうして、主としてフェミニズムにおける白人性・中産階級性・異性愛志向性と、それらに合致しない女性集団の周縁化³⁾に対する見直しがおこなわれ、そして女性の“内なる差異”が重要視されるようになった。すなわち、女性は人種、民族、階級、性的志向、さらには年齢、身体的障害といった諸要因の影響によって分岐するという点が指摘され、「差異」という概念の強調を通じて、女性の“多様性”への関心が進展してきたのである。

「差異」という概念に含まれる女性の多様性ないし複数性という意味あい
は、従来の“女性（たち）”という単一用語の疑いなき使用に対して必要な
「解毒剤」を供給するものとして⁴⁾、イギリスにおいて厚い支持をえてきた。
女性の“内なる差異”をフェミニスト研究にとりいれる必要性を説く論調は、
いまや主流となりつつあるといっても過言ではない。そして「差異」は、今
日のイギリス女性学における一つのキーワードとなっている。しかし、それ
を実際どのようにフェミニズムの理論や実践の有効な構成部分として活かし
うるかに関するまとまった議論は、あまりなされていないように思われる。
本稿では、この用語をめぐる幾つかの個々の議論を概観することによって、
「差異」という概念の意味するもの、およびその有効性と限界について探って
みたい。

1. 「差異」の概念化をめぐって

差異 (difference) という概念は、西洋フェミニズムとの関連において長い
歴史をもっている。およそ1840年代から1920年頃までの、婦人参政権獲
得運動を中心とする第一波フェミニズムにおいては（差異という用語自体は
使われなかったにせよ）、女性がどの程度男性と「同じ」かあるいは「異なっ
ている」という問題は、階級といった要素による分割と同様に、19世紀の
社会における女性の役割や権利や潜在力に関する議論の基礎を形成した
(Gordon, 1991)。また、1960年代に始まる現代の第二波フェミニズムにおい
ては、女性の経験を男性の経験と比べた際の不平等や不利益を指摘し、ある
いは先行的に低い地位を与えられてきた女性性ないし女性文化を再評価する
ために「差異」という用語が暗示的・明示的に採用されてきた (Maynard,
1994; Humm, 1995)。こうして、例えば労働・教育・政治といった公的領域
における性差別の研究、あるいは女性と言語の分析、女性の表現形式に関す
る議論、さらには性暴力に伴うリスクに関する研究等がおこなわれてきたの
である。つまりこれまで「差異」という用語は、主に‘男女間の差異’を表
わすものとして扱われてきたといえる。そして今日のイギリス女性学におい

て、「差異」という用語は主に‘女性間の差異’を表わすようになりつつあるが、その概念化のアプローチとしては、女性の経験の多様性に焦点をあてる方法に加えて、ポストモダニズムによって提示される方法という後述の系譜が併存している。

女性の“経験”をその研究の基本とすべきことは、第二波フェミニズムの成立期から、今も変わらぬ女性学の中心的教義の一つである。女性の経験に焦点をあてることは、自身の状況に関する過去の沈黙を快復し、伝統的学問領域の知の限界に挑戦する一方法とみなされてきた。ドロシー・スミスによれば、フェミニズムが経験から出発すべきであると論じられてきたのは、そうした見地からのみ、女性世界が男性世界と異なる仕方で組織立てられている範囲をみるのが可能となるからである (Smith, 1988)。

女性間の差異に着目する現代フェミニズムの新しい動向のなかで、白人中産階級に属さないいわゆるマイノリティの女性の経験に焦点をあてることは、人種や階級が女性の社会・経済的位置づけにおいて重要な役割を果たす道筋を際立たせる。メアリー・メイナードによれば、例えば“人種”という要因が労働・教育・医療・メディア等の領域で女性の経験や扱いにどれほど影響を及ぼしているかといった議論を通じて、女性の多様な経験の考察は、次の二つの意味で「差異」を可視化してきた。一つは、“女性”のみならず“人種”や“階級”もまた一元的なカテゴリーではないという事実の認定であり、もう一つは、‘抑圧の所在’が例えば黒人女性と白人女性とでは異なる場合があるという視点の喚起である⁵⁾。

すなわち、一つ目の点については、例えば従来「黒人」と一括して分類されてきた人々の間にも、イギリスにおいては南アジア系、アフリカ系、カリブ系というように、それら相互の間（ないしその‘内部’）には多くの差異が存在する (Brah, 1992) といった指摘がなされてきた。この種の見解は、多様性強調の文脈において、今日では大方のコンセンサスがえられているように思われる。

また後者の‘抑圧の所在’に関する差異をめぐることは、主要な論点が三つ

あげられよう。まず第1は、“家族”の捉え方に関するものである。例えばカービーらの黒人フェミニストは、黒人女性にとって“家族”はレイシズムに対する抵抗と連帯のための領域でもあり、必ずしも女性抑圧を説明する中心的位置に固定されるべきものではないことを示唆してきた (Carby, 1982; Amos and Parmar, 1984)。また、資本主義の変動に対して闘う白人労働者階級の家族にも、同様の機能があることも指摘されている (Lees, 1986)。

第2は、“再生産”における抑圧の所在に関するものである。イギリスの白人労働者階級の女性が、家事使用人として長いあいだ中流・上流階級の家庭に（乳母の機能を含む）家事労働を提供してきたことはよく知られている。例えばアン・オークレーの名著『主婦の誕生』の一節によれば、1841年のイングランド・ウェールズの国勢調査では家事労働に雇われていた女性の数は712,493人で、他の職業（綿工業、農業、教職等）に就く女性の合計数の2倍以上であったという (Oakley, 1974)。また先のカービーは、黒人女性が白人家庭に家事労働力を供給することによって（黒人労働力の再生産のみならず）白人労働力の再生産にも関わっているという点を指摘しているが (Carby, 1982)、今日の「差異」をめぐる議論のなかで、この視点がクローズアップされるところとなった⁶⁾。

そして第3は、“家父長制”の捉え方をめぐるものである。この概念は、あらゆる社会における男性の女性支配、つまり女性を犠牲にして男性に特権を与える普遍的な政治構造を表わすものであり⁷⁾、現代フェミニズムにとって最も重要な概念の一つであり続けてきた。これに対して例えばバレリー・エイモスらの黒人フェミニストは、「家父長制的諸関係」を普遍的なものとして断定することが、白人男女による黒人男女への“人種差別”を隠すことにつながるとして異議を唱えている (Amos and Parmar, 1984; Bryan *et al.*, 1985)。

このように「差異」という概念を通して女性の経験の多様性に焦点をあてることは、女性に帰せられてきた経験の均質性に挑戦するものであるといっ
てよい。そしてこの均質性への挑戦という側面が、ポストモダニズムの思想

的傾向と結びつき、差異の概念化に関するもう一つの系譜につながってきた。

大まかにいえば、ポストモダニズムの思想的スタンスは、客観的・普遍的・絶対的「真実」に対する懐疑によって特徴づけられる。客観性、普遍的秩序、合理的・画一的自我という仮定の追究を前提とした近代合理主義的世界観と対峙するポストモダンの世界観は、解体、脱構築、複合的自我を強調する。したがってポストモダニズムは「差異」について多くの含蓄を有しており、おそらく何か特定の権威的説明を否定する見解および意味や構成の複数性に適用されうるし、また個人を構成する主体の複数性に関連づけうる (Maynard, 1994)。そこでは、差異がポストモダン世界の中心的存在として仮定され、また差異を通じた分析法としての“脱構築”が擁護されている。そしてこのような観点から、多くの(黒人・白人)フェミニストたちが、フェミニズム研究にとってのポストモダンの思考の重要性を指摘してきた (Spivak, 1988, 1990; Hekman, 1990; Nicholson, 1990; Hall, 1992; Barrett, 1992)。

こうしたポストモダニズムの脱構築に基づく差異と、経験の多様性に基づく差異とは、その含意において明らかに隔たっており、また一般に対照的とみなされる哲学に基づいてもいる。しかし、ジェンダーや人種に関する両者の主張には、いくつかの類似性が見出される。まず両者は、女性の不均質性の強調とともに、ジェンダー抑圧や人種抑圧の本質に関する広範な一般化に対するきわめて明確な懐疑を共有している。また両者とも、不問にされ固定化されてきた「男対女」、「白対黒」といった二元論的な両極化に異議を唱えている。すなわち現代フェミニズムにおける「差異」の概念化に関する二つの系譜は、異なる方法において‘女性’や‘黒人’、‘家父長制’や‘人種’といった用語の単一性と意味とを解体し転換させてきたのである。

このように「差異」の強調は、「女性一般」という単一的な分類法を超えて複合的なアイデンティティを可能にし、また解放的自我の構築への新たな可能性を開きうる。アブタール・ブラウによれば、その有効な成果の一つは、

「女性性」や「黒人性」がポジティブな意味あい結びつけられるようになり、単に“抑圧”の観点からのみ捉えられなくなってきたことである⁸⁾。

2. 「差異」という概念の危険性

しかしながら、この概念を無批判に受け入れることには、いくつかの危険性が伴う。まず、経験の差異を重視するアプローチは、経験に関する広範な種類の個別的研究の分裂増殖に通じ、多様性が無限に創られる危険性をはらんでいる。メイナードが指摘しているように、このことは、社会を単に異なった個人・集団の混合物という観点から見るリベラル多元論に結びつきやすい (Maynard, 1994)。こうした多元論においては、全員が同等のレベルに存在するものとして「差異」が扱われ、あるいは多様性のすべての形態が、差異の諸例としてひとまとめにされがちである。この種の多元論は、つとにカービーによって強く批判されているように、不平等や権力という観点からの分析を不可能にするようにつくられている (Carby, 1982)。こうした多元論のもとでは、資源や機会等へのアクセスにおける差異が、おもに個人的な能力差や運といった観点から説明できるようになり、より構造化された社会・政治的説明を提供しない。さらに、女性たちが共有している諸経験よりも、女性たちを分断するものを強調する多元論の傾向は、「何でも許容される」多様性⁹⁾という文化的相対主義を助長し、例えば単に異なるものとしての白人女性と黒人女性の経験について考察するという退歩を導きうる。つまりそれは、序列や拘束力をもたない“区別”に対する正当性に結びつきやすい。ミシェル・バレットは、経験的多様性に基づく差異の強調が、コモンセンスという疑問の余地のない常識に転換され、結果として相対主義的な見解を導くという理由で、この立場を批判している (Barrett, 1987)。またフロヤ・アンジラスによれば、多様性強調の文脈で用いられる「民族」という概念も、“多民族的社会”や“多元文化主義”というリベラル派の観点に結びついて、レイシズムの影響力を不明瞭にするという傾向をもってきた (Anthias, 1990)。女性の多様な経験の強調が、ゲッター化された政治学に通じる危険

性については、多くが論じられている (Parmar, 1989; Adams, 1989; Harris, 1989; Brah, 1991, 1992).

さらに、エリザベス・スペルマンやフェリー・シモンズは、経験の差異を重視するアプローチにおける 'us' (=白人女性) と 'them' (=非白人女性) という含意について批判している (Spelman, 1988; Simmons, 1992). つまりそれは、ある女性たちには適用されるが他の女性たちには適用されないような前提概念の存在を暗示しうる。ここでの白人性 (whiteness) は、それ自身が人種化されたアイデンティティとはみなされず、かつ“脱構築”が必要であるものとはみなされていない。したがって例えば「人種問題」は白人にとっての問題ではなく、非白人にとっての問題とみなされたままとなる。

このように、単独で「差異」に焦点をあてることは、いわば“他者を抑圧する差異”の諸条件を隠すというリスクを伴っており、このことは、レイシズムや白人至上主義といった論点の周縁化に通じる危険性があると思われる。メイナードが指摘しているように、レイシズムにおいては、差異それ自体よりも、差異に付加された“価値”が重要な役割を果たしている (Maynard, 1994). したがって、人種やジェンダーといった要素があたかもレイシズムや家父長制的抑圧との連関が何もないかのように論ずる傾向は危険である。差異だけに焦点をあてることは、そうした後者の諸力の側面を説明するのに十分ではない。これに対してジェイムズ・ドナルドらは、例えば人種的な論法やアイデンティティ化の機構が、どのように関連づけられ配置されているか、またどんな結果を伴っているかについて分析することが重要であると示唆している¹⁰⁾.

しかしまた一方、「人種」という概念が原理主義的な方向で用いられる危険性についても、例えば黒人の民族的絶対主義への自己同一化が間接的にニュー・ライトの弁明と政治活動を是認してきたとする指摘がなされ (Gilroy, 1992), 注意が喚起されている。因みにアメリカにおいても、経験の多様性に基づく差異とポストモダンの差異双方の要素を最近の研究に組入れているベル・フックスは、植民地・帝国主義パラダイムに関連した「黒人性

(blackness)」という原理主義的で狭量な公式化の見直しを唱えている (hooks, 1991).

ステュアート・ホールによれば「黒人」という用語は、最初にレイシズムという共通の経験および制度的・個人的ベースでの白人との溝を表示するための政治的カテゴリーとして採用された¹¹⁾。その意味で「黒人の経験」という捉え方は、その内なる差異にかかわりなく黒人たちが「他者」として位置づけられた道筋に対する抵抗や批判という、新しい政治学への基礎を供給するものである。しかしながら近年「黒人」という用語の使い方は、他文化集団の存在と必要性を軽視し、また必ずしも自身をこの観点から規定しない人々にレッテルを貼るものとして批判されてきている¹²⁾。ブラック・フェミニズムの進展は、たしかに白人中産階級中心の主流フェミニズムに関する欠陥と不備への挑戦において大きな意義をもつものであった。しかし一方、メイナードが触れているように、そうした批判がブラック・フェミニストという特定集団の特権でもなく、また西洋諸国の人々からのみ発せられたものでもないことを想起することは、重要である¹³⁾。

女性間の差異と多様性を認識し、フェミニズムがこれに照らしてその学問的・政治的実践のあり方を再考することの重要性は、むろん否定されるべきではない。しかし、差異に関する考察を通じて、単に女性が相互に区別される道筋のみならず、明確かつ特殊な従属形態がもたらされるメカニズムとプロセスを追究することが肝要であろう。女性の“内なる差異”に注意を払うことは重要であるが、それを劣等性や不平等や従属の基盤としてうちたてる諸力を、それ自身で説明することはできない。したがって分析の焦点を、差異単独から、この差異を抑圧に転換する社会的関係へとシフトさせる必要がある (Brah, 1991; Barrett, 1992; Hall, 1992; Maynard, 1994).

3. 女性の「差異」と「共通性」

しかし、例えば先のバレットは、最近のフェミニズムにおける広範な“文化志向”について懸念を述べている。彼女によれば、そこでは資本主義、家

父長制，ジェンダー区分された労働市場などに焦点をあてた社会構造的モデルから離れたスタンスがとられ，それに代わって，文化，セクシュアリティ，象徴化，表現といった問題が強調されている¹⁴⁾。また，リン・シーガルによれば，基本的に女性文化の再評価と男性文化からの分離を目指すいわゆる文化フェミニズムの理論的前提には，「女性＝善」，「男性＝悪」という二項対立思考があり，そこでは階級抑圧や人種抑圧の問題が回避されている¹⁵⁾。しかし，文化や言説に関する問題はフェミニズムにとってひとしく重要な部分ではあるが，社会関係や社会構造から生じる“現実の結果”は，また別のものである (Brah, 1991; Hall, 1992; Maynard, 1994)。例えばブラウは，「日常の生の経験」と「社会的関係としての経験」との有効な区別をおこなうべきであるとしている。彼女によれば前者は個人の伝記に関連し，後者は歴史的・社会構造的諸条件において諸集団が位置づけされる道筋に関連しているが，ここでは「集合的経験が個人的経験の総和をあらわすのではないように，個人的経験を集合的経験の直接的表現と捉えることはできない」¹⁶⁾。つまり互いに独立的なこの二つの経験レベルが，一方に偏りなく分析されなければならない。

また，ポストモダニズムの言説における自我およびアイデンティティの多元的形態は，何らかの“自覚的”な行動や意志について懐疑的な傾向をもっている。しかし，ジェンダー，人種，階級といったカテゴリーの解体は，そのカテゴリー自体を破壊したり超越したりすることではなく，それらに含まれる矛盾や神秘化あるいは隠された可能性を可視化することにつながるであろう。ジェンダー，人種，階級といったファクターを通して考察することは，その正当性や有効性への挑戦にとって不可欠のものである。

こうした文脈から最近では，抑圧されたアイデンティティの蓄積や区分化された経験を交差させた，抑圧の階層構造に関する集合的な研究の必要性が提起されてきた (Parmar, 1989; Brah, 1991; Maynard, 1994)。例えばブラウは「一体化の政治学 (politics of identification)」¹⁷⁾ を提唱しているが，これは同集団内の闘争のみならず，世界中のコミュニティも含むグローバルな

規模での他集団の闘争をも認識することによって可能な、提携の政治学である。因みに彼女は、経験という観念が「象徴的かつ物語風に理解する訓練」として重要であるという、興味深い指摘をおこなっている¹⁸⁾。また今日のフェミニストたちが、フェミニズムの白人優越主義的な傾向を克服するために、自身の集団にはみられない他社会の女性の習慣を認識し合理化しつつあるという指摘もなされている (Berkday, 1993)。

ここで、非西洋人（主に第三世界）の女性に対する関心が顕著な研究分野の好例として、たとえば「女性と開発」研究が想起される。エスター・ボズラップの『経済発展における女性の役割』(Boserup, 1970) を先駆として、現在ではこのテーマに関する膨大な研究が生みだされてきている。これらの研究は、家族・市民権・国民・国家といった概念の意味づけが、「第三世界」の状況下にある女性と、「西側諸国」の文脈にある女性とでは違ったものになることを明示してきた。さらにこの研究分野の視座は、しだいに既存の発展理論や発展モデルに女性を統合しようとするものから、よりフェミニスト的な枠組へのくみ替えを企てるものへと変化してきている¹⁹⁾。しかし、西洋における女性の問題に焦点をあててきた主流のフェミニスト研究は、「女性と開発」研究の考え方や含蓄に多くは注目せず、あるいは西洋的現象に対する比較・対比的な事例を供給するところの、別個の関心事としてそれを扱う傾向をもっており、両者は互いに殆ど交差することなく、パラレルに進展してきた (Maynard, 1994)。このように両者間の研究交流はにぶかったのであるが、近年では女性の多様性重視の文脈から、その相互交流の可能性も探られてきている。

女性の抑圧が人種や階級等の相違によって均質的なものでないとすれば、例えば単に「人種」を既存のフェミニスト理論の枠組みに付加するのではなく、抑圧に関するそれぞれの理解を結合し、解放への戦略を再構築しなければならない。したがって、女性の経験における“差異”と“共通性”との双方に光をあてることが、その諸経験の集合的な理解に通じる理論の基礎を供給するであろう。内なる差異にかかわりなく、これまで女性学が明らかにし

てきたように、女性はさまざまな文化を横切って類似の経験を共有している。

本稿の第1節では、“家族”、“再生産”、“家父長制”における女性抑圧の不均質性をめぐる（主として黒人フェミニストによる）問題提起について述べた。しかしながら、この三者は、いずれも女性の「共通の経験」を表わす主要な概念であることも、黒人フェミニストらによって同時に指摘されてきた。次にあげるのはその一例であるが、たとえばブリットンとメイナードは、家族内の母親業、家事、情緒的サービスといった活動がどの社会集団においても「女性に期待されている」という点を捉えて、“家族”を女性に対する抑圧の場とみなす見解を支持している。すなわち、女性の内なる差異にかかわりなく「家族の位置に組み込まれた抑圧から逃れることはできない」²⁰⁾。またタング・ナインは、家族内における女性への暴力の存在を指摘し、フェミニストが家族内の力関係を分析することの重要性を論ずる一方、“再生産”については、（家事使用人の有無にかかわらず）イデオロギー上家事・育児をめぐる最終責任が妻や母に課せられる事実が変わりはないことを指摘している²¹⁾。さらに彼女によれば“家父長制”は、社会的生産においてジェンダーによる労働の分業を通じて操作されるが、雇用の分配に関する統計をみると、人種で区分された職業よりも、性によって区分された職業のほうが均質化の度合いが高い²²⁾。

1990年代のイギリス女性学は、まさに主流フェミニズムにおける均質主義的・普遍主義的・白人主義的な前提に対する問い直しに始まった。しかしながら、このことはジェンダーや人種や階級に関する一般化が不可能であることを意味するわけではない (Knowles and Mercer, 1992)。女性の経験の多様性に気づくことは重要であるが、一方、的確な用語によって女性の一般的特性について語り、また女性の差異と共通性との比較を通じて語ることは、可能であろう。フェミニズムにおいて、差異性と共通性は異性間・同性間の連関をはかる尺度としてこれまで二分法的に両極化されてきたのだが、より包括的なフェミニスト理論を導くために重要なことは、女性間の差異性

と共通性との両方を認め、そして両者をつくりだしているものを分析することであろう。いみじくも黒人フェミニストのフェリー・シモンズは、フェミニストとして大切なのは女性の差異性と共通性との両者を当然のこととするような能力をもつことであると述べている²³⁾。

4. フェミニズムの再考と展望

これまで論じてきたように、女性の「差異」をフェミニズムにおける主要なカテゴリーとして扱おうとする今日の傾向には、注意が必要である。差異は明らかに一つの重要な要素であるとしても、これに単独で焦点をあてることは、殊にレイシズムや権力や抑圧に通ずる他の諸力という別の問題を周縁化することになる。また、人種や階級等の諸要因が、単に女性が経験する抑圧の大きさのみならず、その抑圧の本質を変えているという点を見過ごしてはならない (Maynard, 1994)。すなわち「差異」という概念は、変革への潜在力を伴うものに転換される必要がある。フェミニストの関心は、差異それ自体よりも、差異が織りなす階層構造の把握に配置されるべきであろう。

これまでの議論から、「差異」という概念をフェミニズムにとって有効なものとするために、次の四つの留意点があげられるように思われる。

第1に、社会的生活の文化的側面とともに物質的側面、およびそれらの相互作用から生じる社会的関係の考察が必要である。しかしこれは、文化や信念や主観性が、社会的構造あるいは経済によって決定されているという従来のマルクス主義思想における機械論的な諸仮定への回帰を意味するものではない。それは食糧、住居、賃金、教育といった資源に対するアクセスの問題、および暴力や嫌がらせに起因する制約の問題等が考慮にいれられるべきことを意味している。

第2の重要なポイントは、「白人」という概念を問題化することである (Ware, 1992)。前述のように、白人性 (whiteness) はこれまで人種的アイデンティティとはみなされてこなかった。したがって「人種問題」がとりあげられるとき、それは通常白人以外に焦点をあてることを意味していた。しか

し、レイシズムの過程は、白人の特権と権力の行使およびそのメカニズムに注意を集中することによって、よりよく理解されるであろう。そして例えば単に白人と黒人との相互作用に焦点をあてるだけではなく、白人の特権という当然視された日常性がより直接的に表現される諸状況を考察することが重要である。またこの文脈で重要なのは、「白人」という用語が実際に意味するものを解きほぐすことである。それは、決して均質的なカテゴリーではない。例えばレイシズムを経験するのは必ずしも黒人ではなくユダヤ系やアイルランド系の人々であったりすることを忘れてはならない。さらに、白人・黒人というカテゴリーの意味は一定ではなく、社会・文化的条件によって変化することに留意する必要がある。つまり「人種」という概念は、不断に政治的な闘争によって変形されてきた不安定な社会的意味の複合体²⁴⁾であると捉えるべきであろう。

それに関連して、第3に重要なポイントが導き出される。すなわちプラティバ・パーマーが論じているように、黒人社会もまた他の社会と同様に文化、性、階級によって分断されており、したがって人種のアイデンティティだけでは、集団を組織化する基礎にはなりえないことに留意する必要がある (Parmar, 1989)。したがって、例えばブラック・フェミニズムも“人種差別”と関連のある問題のみを扱うのではなく、その他の広がりをもつことが重要であろう。

そして第4に重要な点は、ジェンダーや人種や階級のアイデンティティを分断することなく、それらの相互作用を通じた経験が生ずる道筋に焦点をあてることである。ジェンダーや人種等の諸問題は、それぞれ独立したシステムを構成しているわけではないことに留意しなければならない。したがって、たとえばセクシズムとレイシズムとが、いかに互いを維持し支える支配システムを連結させているかが問われるべきであろう。アメリカにおいても、最近リンダ・ゴードンは、ジェンダーの人種化された様相、階級的特質を伴った概念としてのジェンダー、階級の人種化された様相等々に分析的な留意を注ぐことの重要性を指摘している (Gordon, 1991)。

ブラウが述べているように、もしも性や人種や階級の抑圧に関する議論が社会的構造に依存しているならば、それは「歴史的に可変の経験に由来する共通性であり、これから歴史的に変えられるべき対象」である²⁵⁾。女性間の差異に関する議論は、従来の西洋フェミニズムにおける「人種」や「階級」への関心の欠落や、過度の一般化に対して注意を喚起してきた。しかしながら、分断化の過度の強調は、フェミニズムが歴史的に関わってきた“抑圧”との対決において、いかなる有効な政治的・論理的基盤も提供しないのみならず、まさにそうした抑圧の存在を見過ごすという危険を冒しているのである。

フェミニズムが女性抑圧を論ずる際の「女性」とは誰をさすのか、もはや説明不要のコードではなくなってきた。そして、フェミニズムが、女性というカテゴリー全体を一つの被抑圧集団と捉える思想であるとすれば、たとえば女性が被る人種抑圧や階級抑圧を放置しておくことはできない。主流フェミニズムは「アカデミック・フェミニズムという鎮痛ブランド」²⁶⁾を纏って、黒人や労働者階級や同性愛者といったマイノリティ女性の諸問題を周縁化したとして批判されてきた。“有徴性”をもたない白人/中産階級/異性愛女性の抑圧は、有徴性をもつ女性の抑圧とは異なるものでありうるし、また前者の存在自身が後者に対して抑圧的に働く場合もあるかもしれない。

アーロンとウォルビィが述べているように、女性の中で従属することのない社会を構築するためには、それを可能ならしめる世界観ないし知的空間の発展が必要である。それは、日常の個人的経験に概念的形式を与え、個人的なものを政治的なものとして明らかにすることによって生み出されるが、知としての認可と影響力を得るためには、その思想が社会的に基礎づけられ、かつ社会的に構築されることが必要である²⁷⁾。フェミニズムは、女性の多様性・複数性を、その理論や言説の不毛な主導権争いに帰結させるのではなく、生産的な政治的効力として活かす方策を模索しなければならない。

おわりに

これまで述べてきたように、女性の「内なる差異」がクローズアップされてきた背景には、女性は多様な経験をもった存在であり、その研究には白人中産階級中心の研究とは異なった概念設定が必要であるという認識が横たわっている。

このことは次に、フェミニズムそれ自体のアイデンティティの再公式化に関する議論を導いてきた。フェミニズムが単にジェンダーの問題のみを扱うとすれば、内なる差異を抑圧してフェミニズムのアイデンティティを普遍主義的に固定してしまいがちになる。また、フェミニズム理論をただ一つの普遍的な「真実」とすることは、そのアイデンティティを硬直化させ、結果的に現実への適応力を失うことにつながりかねない。西欧形而上学における主体の画一性ないし一元性という概念は、フェミニズムがもとより問題視し続けてきたことである。

前稿でも触れたように、主に1980年代におけるイギリス女性学の分断化を克服するために、新しい女性学の全国組織の必要性が唱えられ、1989年には全英女性学ネットワーク (Women's Studies Network, UK) が設立された。その目的は第1にコミュニケーションのチャンネルや交流を広げることによって女性学の一層の発展に寄与すること、第2に研究の継続を可能とするために、全国の制度的機関の利用を集合的に保証することである²⁸⁾。すなわち、女性学が世代を越えて息長く生き残り根づくために必要な、フェミニストの知見と制度的枠組み双方の発展を促進することを目的としている。同ネットワークがこれらの目的を追求する一つの方法は、全国的・学際的な女性学の年次大会を開くことであるが、1989年以来続くその年次大会では、その議論の大半が“女性の内なる差異”の問題に費やされている²⁹⁾。すなわち、今日のイギリス女性学界全体を通じて、女性の経験の多様性と、それをめぐる女性学のあり方が問われているといえよう。そして、この作業は、なお流動的かつ発展途上のものであり、決して確定的で一枚岩的なものではない。

ここで、殊にイギリス女性学の大きな特徴として、フェミニスト理論の数々の脈絡を織り合わせるという作業が、早い段階からジュリエット・ミッチェルらの社会主義フェミニストによって最も意欲的になされてきたということ想起してみたい（前稿 p.194 参照）。アリソン・ジャガーによれば、イギリスに発祥した同派のフェミニズムの特徴は、女性抑圧の無数の形式を相互関連させる試みである³⁰⁾。近年においても、たとえばリン・シーガルは、性と階級と人種による抑圧からの解放をめざす社会主義フェミニズムの可能性について述べている。彼女によれば、たとえば労働運動の組織にくみ込まれた女性なり、黒人なりが、その組織で自らの利害と自律性を見失わないためにフェミニスト・グループや人種差別反対グループにも所属し続けることによって、複数の視角による闘争のなかから、これまで以上に個人のニーズに対応できる新社会主義フェミニズムが可能となる³¹⁾。

一方、ポストモダン・フェミニズムは、ただ一つの固定的なフェミニストの見解を確立するための統合という試みを、典型的な「男性的思考」であるとして斥けた。すなわち、女性の経験は人種的・階級的・文化的境界を横切って異なっているために、それらの統合は神話にすぎず、単一でない多様なフェミニズムが期待されるべきであり、多くのフェミニスト思想が併存してよいという³²⁾。つまり、分断化した種々の思想を単一の真理に結合し変化に柔軟でなくすることを否定したのであった。

またタング・ナインは、ブラック・フェミニズムは性、人種、階級による抑圧を扱うべきであるとしているが、この観点を支持する人々があまねく参加できるようになるためには、どのような人種の女性でも賛同できるイデオロギー的立場を形成しなければならないと述べている³³⁾。さらに彼女によれば、社会主義フェミニズムにおいては階級問題が中心を占める危険性があるので、性による抑圧の問題を強調するためにラディカル・フェミニズムを確保すべきであり、リベラル・フェミニズムが現体制内での改革を求めるのもまた望ましいことである。広範な基盤をもつフェミニズムのなかで、それら四つのフェミニズムが強調され、可能なかぎり協調しあって抑圧の諸問題を

解決していかなければならない³⁴⁾。

これらの主張はともに、フェミニズム理論が個々の具体的なモメントに応じて流動的にそのアイデンティティを変質させながら、その時々の問題場面に最も有効な言説や戦略を提示していくものであるべきことを示唆しているのではなかろうか。つまりフェミニズムを、そのアイデンティティの単一化・固定化によって硬直した普遍主義ないし原理主義へと陥らせないために、ポストモダニズムのネットワーク的主体概念を利用しうる。あるいは、フェミニズムの複数性をそのまま内包しながら、「異質なる存在」の量的・質的効力を利用して、フェミニズムに共通の目的を達成するための戦略をたてることも可能なのではないだろうか。

イギリス女性学における女性の「内なる差異」の追究を通じて「他者を抑圧する差異」への認識が浸透するにつれて、おそらく、あらゆる差別や抑圧からの解放をめぐる“人権”の視点がフェミニズムにおいて一層重視されてくると、私は予想している。前稿でも述べたように、もしフェミニズムが女性にとっての、ひいては人間社会にとっての善を追求するものであるとすれば、女性の多様性と差異性を、人間としての共通性に調和させることが、現代フェミニズムの主要な課題であるだろう。これに関連して、最近ではリベラル・フェミニズム内部においても、とくに人間共通の善よりも“個人的”な自由を強調しすぎる傾向に対する見直しがある³⁵⁾。それは、根本的なヒューマニズム (radical humanism) への新たな途を探ろうとする動向のあらわれであるように感じられる。

このことは同時に、抑圧が単に「男性と女性」あるいは「白人と黒人」との間におこるという観点を解体しつつ、女性同士あるいは男性同士の間の抑圧関係の考察を可能にするであろう。それはまた、フェミニズムにおいて男性を“対立項”とみなす捉え方を超えて、男女がさまざまな抑圧に対する挑戦において協調しうる可能性をも示唆していると言えそうである。

注

- 1) 有賀美和子「イギリス女性学の諸相(その1)」。東京女子大学紀要『論集』第46巻, 第1号, 1995年9月, pp. 185-203.
- 2) Tang Nain, G., 'Black Women, Sexism and Racism: Black or Antiracist Feminism?' *Feminist Review*, no. 37, Spring 1991.
- 3) Simmons, F. N., 'Difference, Power and Knowledge: Black Women in Academia.' In Hins, H. *et al.* (eds.), *Working Out: New Directions for Women's Studies*. London: Falmer Press, 1992, pp. 51-60: p. 56.
- 4) Maynard, M., "'Race", Gender and the Concept of "Difference" in Feminist Thought.' In Afshar H. and M. Maynard, *The Dynamics of 'Race' and Gender*. London: Taylor and Francis, 1994, pp. 9-25: p. 9.
- 5) *Ibid.*, pp. 14-15.
- 6) Tang Nain, *op. cit.*
- 7) Tuttle, L., *Encyclopedia of Feminism*. Harlow: Longman, 1986, p. 242.
- 8) Brah, A., 'Questions of Difference and International Feminism.' In Aaron, J. and S. Walby (eds.), *Out of the Margins: Women's Studies in the Nineties*. London: Falmer Press, 1991, pp. 168-176: p. 174.
- 9) Maynard, *op. cit.*, p. 18.
- 10) Donald, J. and A. Rattansi (eds.), *'Race', Culture and Difference*. London: Sage, 1992, p. 1.
- 11) Hall, S., 'New Ethnicities.' In Donald, J. and A. Rattansi (eds.), *'Race', Culture and Difference*. London: Sage, 1992.
- 12) Brah, A., 'Difference, Diversity and Differentiation.' In Donald, J. and A. Rattansi (eds.), *'Race', Culture and Difference*. London: Sage, 1992.
- 13) Maynard, *op. cit.*, p. 11.
- 14) Barrett, M., 'Words and Things: Materialism and Method in Contemporary Feminist Analysis.' In Barrett, M. and A. Phillips (eds.), *Destabilizing Theory: Contemporary Feminist Debates*. Cambridge: Polity Press, 1992, pp. 201-219: p. 204.
- 15) Segal, L., *Is the Future Female?: Troubled Thoughts on Contemporary Feminism*. London: Virago Press, 1987. (邦訳:『未来は女の何か』織田元子訳, 勁草書房)
- 16) Brah, 1991, p. 172.
- 17) *Ibid.*, p. 175.
- 18) Brah, 1992, p. 141.
- 19) McFarland, J., 'The Construction of Women and Development Theory.' *Canadian Review of Sociology and Anthropology*, vol. 25, no. 2, 1988.
- 20) Brittan, A. and M. Maynard, *Sexism, Racism and Oppression*. Oxford: Blackwell, 1984, p. 146.
- 21) Tang Nain, *op. cit.*
- 22) *Ibid.*
- 23) Simmons, *op. cit.*, p. 56.
- 24) Omi, M and H. Winant, *Racial Formation in the United States*. London and

- New York: Routledge & Kegan Paul, 1986, p. 68.
- 25) Brah, 1992, p. 174.
- 26) Aaron, J. and S. Walby (eds.), *Out of the Margins: Women's Studies in the Nineties*. London: Falmer Press, 1991, p. 5.
- 27) *Ibid.*, p. 1.
- 28) *Ibid.*, p. 4.
- 29) *Ibid.* 同書は、1989年と1990年にコヴェントリー・ポリテクニークで開催された2回の年次大会における成果の記録である。そのほか、Hins, H. *et al.* (eds.), *Working Out: New Directions for Women's Studies*. London: Falmer Press, 1992 (1991年の年次大会の成果)。
- 30) Jaggar, A. M., *Feminist Politics and Human Nature*. Totowa, N. J.: Rowman & Allenheld, 1983, p. 316.
- 31) Segal, *op. cit.*
- 32) Tong, R., *Feminist Thought: A Comprehensive Introduction*, 4th ed. London: Routledge & Kegan Paul, 1994, p. 7.
- 33) Tang Nain, *op. cit.*
- 34) *Ibid.*
- 35) Tong, *op. cit.*, p. 38.

参考文献

- Adams, M. L. (1989), 'There's No Place Like Home: On the Place of Identity in Feminist Politics.' *Feminist Review*, no. 31.
- Amos, V. and P. Parmar (1984), 'Challenging Imperial Feminism.' *Feminist Review*, no. 17.
- Anthias, F. (1990), 'Race and Class Revisited: Conceptualising Race and Racisms.' *Sociological Review*.
- Anthias, F. and N. Yuval-Davis (1983), 'Contextualising Feminism: Gender, Ethnic and Class Divisions.' *Feminist Review*, no. 15.
- Barrett, M. (1987), 'The Concept of Difference.' *Feminist Review*, no. 26.
- Barrett, M. (1992), 'Words and Things: Materialism and Method in Contemporary Feminist Analysis.' In Barrett, M. and A. Phillips (eds.), *Destabilizing Theory: Contemporary Feminist Debates*. Cambridge, Polity Press.
- Berkday, F. (1993), 'Looking from the "Other" Side: Is Cultural Relativism a Way Out?.' In de Groot, J. and M. Maynard (eds.), *Women's Studies in the 1990s: Doing Things Differently?*. London, Macmillan.
- Boserup, E. (1970), *Women's Role in Economic Development*. London, Allen & Unwin.
- Brah, A. (1991), 'Questions of Difference and International Feminism.' In Aaron, J. and S. Walby (eds.), *Out of the Margins: Women's Studies in the Nineties*. London, Falmer Press.
- Brah, A. (1992), 'Difference, Diversity and Differentiation.' In Donald, J. and A. Rattansi (eds.), *Race, Culture and Difference*. London, Sage.
- Bryan, B., S. Dadzie and S. Scafe (eds.) (1985), *The Heart of the Race: Black Women's Lives in Britain*. London, Virago Press.

- Carby, H. (1982), 'White Woman Listen! Black Feminism and the Boundaries of Sisterhood.' In Centre for Contemporary Cultural Studies, University of Birmingham, *The Empire Strikes Back: Race and Racism in '70s Britain*, London, Hutchinson.
- Donald, J. and A. Rattansi (eds.) (1992), *'Race', Culture and Difference*. London, Sage.
- Gilroy, P. (1992), 'The End of Antiracism.' In Donald, J. and A. Rattansi (eds.), *'Race', Culture and Difference*. London, Sage.
- Gordon, L. (1991), 'On Difference.' *Genders*, no. 10.
- Hall, S. (1992), 'New Ethnicities.' In Donald, J. and A. Rattansi (eds.), *'Race', Culture and Difference*. London, Sage.
- Harris, K. (1989), 'New Alliances: Socialist Feminism in the Eighties.' *Feminist Review*, no. 31.
- Hekman, S. J. (1990), *Gender and Knowledge: Elements of a Postmodern Feminism*, Cambridge, Polity Press.
- hooks, b. (1991), *Yearning: Race, Gender, and Cultural Politics*. London, Turnaround. (尚, 名前の頭文字が小文字となっているのは, 黒人の姓が奴隷制において強制的につけられたことに対する異議の表明である.)
- Humm, M. (1995), *The Dictionary of Feminist Theory*, 2nd ed. Columbus, Ohio State University Press.
- Knowles, C. and S. Mercer (1992), 'Feminism and Antiracism: An Exploration of the Political Possibilities.' In Donald, J. and A. Rattansi (eds.) (1992), *'Race', Culture and Difference*. London, Sage.
- Lees, S. (1986), 'Sex, Race and Culture: Feminism and the Limits of Cultural Pluralism,' *Feminist Review*, no. 22.
- Maynard, M. (1994), "'Race", Gender and the Concept of "Difference" in Feminist Thought.' In Afshar H. and M. Maynard, *The Dynamics of 'Race' and Gender*. London, Taylor & Francis.
- Ngcobo, L. (ed.) (1988), *Let It Be Told: Essays by Black Women in Britain*. London, Virago Press.
- Nicholson, L. (ed.) (1990), *Feminism/Postmodernism*. London, Routledge & Kegan Paul.
- Oakley, A. (1974), *Woman's Work: The Housewife, Past and Present*. New York, Pantheon Books. (邦訳: 『主婦の誕生』岡島芽花訳, 三省堂)
- Parmar, P. (1989), 'Other Kinds of Dreams.' *Feminist Review*, no. 31.
- Ramazanoglu, C. (1989), *Feminism and the Contradictions of Oppression*. London, Routledge & Kegan Paul.
- Simmons, F. N., (1992), 'Difference, Power and Knowledge: Black Women in Academia.' In Hins, H. et al. (eds.), *Working Out: New Directions for Women's Studies*. London, Falmer Press.
- Smith, D. (1988), *The Everyday World as Problematic*. Milton Keynes, Open University Press.
- Spelman, E. (1988), *Inessential Woman: Problems of Exclusion in Feminist Thought*. London, The Women's Press.

Spivak, G. C. (1988), *In Other Worlds*. London, Routledge & Kegan Paul.
Spivak, G. C. (1990), *The Post-Colonial Critic*. London, Routledge & Kegan Paul.
Ware, V. (1992), *Beyond the Pale: White Women, Racism and History*. London,
Verso.